

令和 4 年 6 月 7 日現在

機関番号：34506

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K02913

研究課題名(和文) コミュニカティブな初級ドイツ語授業に参加する大学生の「外国語学習観」に関する研究

研究課題名(英文) A Study on "Views on Foreign Language Learning" of University Students Participating in Communicative Elementary German Classes

研究代表者

藤原 三枝子 (Fujiwara, Mieko)

甲南大学・国際言語文化センター・教授

研究者番号：50309415

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：ドイツ語学習者は、高校英語を「テスト準備としての勉強」が中心で「異文化間コミュニケーションの準備としての学習」は少なかったと考えている。ドイツ語の授業環境に対する認知は、英語学習経験に関連していた。ドイツ語教師は、口頭コミュニケーションや文化・社会事情を教えたいと希望し、日本語訳を必要とは考えていない。また、学習者は、単位取得等に関する道具的動機づけが強く、ドイツの文化や社会への関心は、学習意欲に直接的影響が見られない。理想L2自己の形成には、自律性と有能感を育成する授業環境が必要である。教師調査では、教師の学習経験や教授経験の言語化を教師と参観者が共有することで多層的な省察を試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ドイツ語教育において、外国語に対する学習観と態度及びその変化に注目し、明確な研究手続きによって行われた調査研究はまだ非常に少ない。とりわけ、大学におけるドイツ語学習を、英語学習を体験した学習者の中にさらに培われる外国語学習経験として連続的・複合的に捉える科学的な研究は管見の限り、まだ少ない。本調査は、大学でのドイツ語教育が外国語教育全体の大きな目標の一つである言語を使うことができる学習者を育成するために何ができるのかを提案できる研究と考える。

研究成果の概要(英文)：German language learners consider high school English study mainly as test preparation and few think of it as preparation for intercultural communication. The way they think about the German language classroom environment is related to their experience of learning English. German language teachers desire to teach oral communication as well as cultural and social content and do not consider translation into Japanese necessary. Furthermore, the students have a strong instrumental motivation related to earning credits, etc., and it appears that interest in German culture and society does not directly influence their motivation to study the language. The formation of the ideal L2 self requires a classroom environment that fosters autonomy and a sense of competence.

In the teacher survey, a multi-layered reflection was attempted by having the teachers and the observing researcher share in verbalizing their experiences both as learners and as teachers.

研究分野：外国語教育研究

キーワード：ドイツ語 外国語学習観 英語学習経験 ドイツ語を使う自分 教師調査 授業参観

### 1. 研究開始当初の背景

本研究代表者が実施した科学研究費助成事業(2014年度～2017年度)「コミュニケーションなドイツ語教科書と動機づけ研究」で行った質問紙調査の分析の結果、学習が進むにつれて「文法は重要」という思いが強くなり、「日本語訳」の重要性が強まる傾向を示した。コミュニケーションな教材による授業において、「文法・訳読」に対する肯定的態度が強まる結果となった。その一方、聴き取り調査では、大学入学前の英語学習に言及するケースが少なくない。例えば、学習者Aは、高校の英語教育が日本語による文法知識の獲得に重点を置くことにより、「外国語学習とは文法学習だ」という学習観を身につけ、「際限のない暗記」と「作業としての英語学習」に疲れ英語嫌いになったこと、しかし大学で受けたドイツ語の授業で、ドイツで出版された日本語のない教材に対する不安を乗り越え、授業に積極的に参加するようになる。その際に「文法はコミュニケーションの中で必要なものを学ぶのが良い」という学習観へ変化した。ドイツ語使用を目的とする教科書や授業が増えている。英語の次に、第二外国語として大学でドイツ語を学ぶ学生の学習観と、コミュニケーションな授業の目的であるドイツ語使用に関する学習者の態度の調査は、今後のドイツ語教育を考えるために重要な示唆を与えると考えた。

### 2. 研究の目的

コミュニケーションなドイツ語教科書・コミュニケーションな授業を学習者がどのように受け入れるかは、高校までの学習体験に基づく外国語(英語)学習観に少なからず影響を受けていると思われる。本科学研究では、-ドイツ語の授業に参加する大学生は、ドイツ語学習開始段階でどのような学習観・態度をもっているのか、-それは、英語学習によって形成された外国語学習観によって影響を受けているのか、-コミュニケーションな授業の目的であるドイツ語の運用能力を身につけたいという意味は、コミュニケーション・アプローチの教科書・授業によって育成されるのか、また、-学習者の学習観形成に少なからず影響を与えられられるドイツ語教師の自己形成過程・教育観を、教師自身の外国語学習歴・教授歴から探求することを研究目的とする。

### 3. 研究の方法

本研究では、大学においてコミュニケーションなドイツ語授業に参加する学習者とその教師を対象として、2018年度前期と後期に質問紙調査を実施し分析した。前期の調査はドイツ語学習者の高等学校における英語学習経験とドイツ語学習に対する学習観について、同時に、教師のドイツ語教育観について調査した。後期調査は、コミュニケーションな教材で学ぶ大学生のドイツ語使用者としての自己イメージを、Dörnyei (2009) の L2 Motivational Self System に基づいて検討した。また、教師の自己形成過程に関する調査については、授業参観と聴き取り調査を軸として研究を進めた。質問紙による量的調査は藤原三枝子(研究代表者)、教師を対象とした質的調査は森田昌美(連携研究者)の研究テーマとした。

### 4. 研究成果

(1) 2018年度に実施した質問紙調査によって得られたデータの分析については、本研究代表者が公表している論文(2019;2020;2021)に基づき、以下にまとめる(これらの文献については5.「主な発表論文等」を参照)。

① コミュニケーションな初級ドイツ語授業に参加する大学生を対象として、2018年度前期(2018年5月～6月)に行った第1回調査には、14大学36名の先生とその学習者1062名から調査への協力を得た。質問紙はどの項目についても、5. そう思う～1. そう思わない、の5件法で回答する形式であった。以下の2つの点について、次のような分析結果となった：

#### 1) 高等学校の英語の授業で何をよく扱い、何がよく身についたと考えているか

授業でよく扱ったと学習者が考えている項目として、文法、テキストの大意把握、日本語訳による読み、書く、単語や決まった表現、聞き取りが高い平均値を示した。初級ドイツ語の授業で学ぶ大学生は、高校での英語の授業では「テスト準備としての勉強」に関係することをよく扱ったと見做している。また、授業で扱ったことが身についたという強い感覚はもっていないものの、日本語訳による読み、テキストの大意把握、文法等についてはある程度手応えを感じている。その一方で、英語でのコミュニケーション(会話やメールなどのやり取り)、英語圏の文化や社会、日常生活、口頭での説明やプレゼンテーションは、授業での扱いでも、身についた内容でも平均値が低く、「異文化間コミュニケーションの準備としての学習」は十分ではなかったと思われる。

表 1 英語の授業で「よく扱った」と感じていることと「自分の身についた」と感じていること

	①授業でよく扱った内容		②自分の身についた内容	
	M	SD	M	SD
1. 英語でのコミュニケーション	3.12	1.210	2.71	1.146
2. 英語圏の日常生活	2.69	1.109	2.56	1.105
3. 英語で書く	4.23	.893	3.59	1.055
4. 英語の発音	3.73	1.064	3.26	1.130
5. 英語圏の文化や社会	2.78	1.059	2.66	1.094
6. 英語文法	4.40	.874	3.64	1.055

7. 英語聴き取り	4.06	.944	3.34	1.072
8. 日本語訳による読み	4.23	.916	3.78	1.027
9. 口頭発表_プレゼンテーション	2.67	1.200	2.41	1.139
10. 単語や決まった表現	4.19	.900	3.59	1.043
11. 英語の勉強方法	3.34	1.111	3.13	1.119
12. テキストの大体の内容理解	4.24	.899	3.72	1.032

2) 高校での英語の授業体験は、大学でのドイツ語学習と関連性があるか

高校での英語学習で身についたと感じた内容をドイツ語でも学習したいと思う傾向が見られることから、ドイツ語の授業もそれに先行する英語の授業内容とその達成感に少なからず影響を受けていると推測される。また、現在のドイツ語の授業環境をどのように認知しているのか、どのように動機づけられているのかと、高校での英語学習経験とに関連性が認められた。自己決定理論 (Deci & Ryan 1985) における 3 つの基本的心理的欲求である有能感、自律性、関係性の欲求が満たされていると感じる度合いは、高校での英語教育における手応えと正の相関があること、動機づけについては、自己決定度の高い動機づけタイプである同一視調整や内的調整 (内発的動機づけ) と正の相関があることが確認された。こうしたことから、英語学習経験はその後のドイツ語学習の動機づけにも少なからず影響を与えている可能性が示された。

表 2 英語学習経験とドイツ語の学習環境の認知に関する相関関係

		テスト勉強	異文化間コミュニケーション	自律性	有能感	関係性
英語_テスト勉強	Pearson の相関係数 有意確率 (両側)	1				
英語_異文化間 コミュニケーション	Pearson の相関係数 有意確率 (両側)	.447**	1			
ドイツ語 自律性	Pearson の相関係数 有意確率 (両側)	.348**	.220**	1		
ドイツ語 有能感	Pearson の相関係数 有意確率 (両側)	.323**	.193**	.775**	1	
ドイツ語 関係性	Pearson の相関係数 有意確率 (両側)	.324**	.147**	.576**	.550**	1

\*\*、相関係数は 1% 水準で有意 (両側)

② 授業を担当する教師を対象とした前期の質問紙調査の分析結果を、以下にまとめる：

1) 教師は第二外国語としてのドイツ語の授業改善のために何が必要と考えているのか

言語運用能力の養成を目的とするコミュニカティブな授業においては、言語を使いながらその言語行為に必要な言語知識を身につけるというコンセプトをとる。学習者が授業の中で十分に発話することが前提となる。質問紙では、コミュニカティブな授業に関するこうした理解に基づいて 17 の項目を立てて教師の意見を尋ねた。分析の結果、教師は「学習者参加型の授業」、「学習者がドイツ語に触れる機会を多くする」など、学習者が積極的に参加する授業が大切だと考えている。他方、「授業中、教師がなるべくドイツ語を使う」、の項目については標準偏差が大きい、平均値が相対的に低い。「学習者がドイツ語に触れる機会を多くする」ことが大事であるとの回答結果から考えると、教師のドイツ語使用は、本来は望まれることだろう。

2) 教師は第二外国語としてのドイツ語の授業で学習者に何を学んでほしいと考えているのか、学習者が学びたいと思っている内容と相違はあるのか

教師も学習者と同様に、口頭コミュニケーション関連の項目の平均値が一番高い。ただ、差の検定の結果、教師と学習者間に有意差が見られた。また、ドイツ語圏の文化と社会についても、学習者と教師の間で平均値に有意差が確認された。口頭コミュニケーションについても、いわゆるランデスクンデに関しても学習者の学習希望以上に教師の教えたいという希望が強い。座学としての勉強 (単語や決まった表現、テキストの大意把握、ドイツ語で書く、外国語の勉強の仕方、日本語に訳し読む) については、学習者と教師間で平均値に有意差はなかった。

表 3 ドイツ語学習内容に対する学習者と教師の希望

	学習者		教師	
	M	SD	M	SD
コミュニケーション	3.98	1.026	4.76	.435
日常生活	3.80	1.040	4.42	.708
ドイツ語で書く	3.82	1.048	4.18	.882
発音	4.00	.978	4.45	.711
文化や社会	3.86	1.016	4.39	.659
文法	3.83	1.003	4.03	.810
聞き取り	4.10	.954	4.61	.609
日本語に訳し読む	3.86	1.008	2.88	1.111
口頭発表_プレゼンテーション	3.02	1.161	4.24	.902
単語や決まった表現	3.80	.976	4.09	.914
外国語の勉強の仕方	3.62	1.093	4.06	1.029
テキストの大意把握	3.88	.974	4.55	.564

表 4 ドイツ語学習内容に対する学習者と教師の希望：因子分析後の下位尺度得点

	学習者	教師
--	-----	----

	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
座学としての勉強	3.801	.827	3.965	.574
ドイツ語圏の文化と社会	3.826	.973	4.409	.618
口頭コミュニケーション	4.027	.876	4.606	.496

3) テキストのリーディングに関する教師の教育観、学習者のリーディング観との相違について  
教師は日本語訳が必要とは考えておらず、テキストはオーセンティックなものが良いと考える傾向がより強い。

表 5 リーディングに関する学習観と教育観

	学習者		教師	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
日本語訳の重要性	3.35	.893	2.10	1.019
テキストのオーセンティック性	3.47	.891	3.82	.746

4) 授業環境に対する教師の取り組みと、学習者の授業環境に対する認知との相違について



図 1 授業環境に関する認知

自己決定理論に基づいた質問項目に関する回答を分析した結果、教師はクラス内の雰囲気や学習者間の関係性の構築に配慮し、学習者が有能感を持つような授業運営に努めているが、自律性の欲求を満たすような工夫に関しては、相対的に低い値を示した。また、学習者の認知は教師の認知に比べて、とりわけ有能感と関係性についてかなり低い。

③ 後期の質問紙調査(2018年12月~2019年1月)には、14大学986人の学習者から参加協力を得た。ドイツ語使用者としての自己イメージについて、Dörnyei (2009) の L2 Motivational Self System (以下、L2MSS) に基づいて調査した。

1) 動機づけの自己システム (L2MSS) に関して、どのような自己概念をもっているのか

Schaaf (2018) の調査と同様に、道具的動機づけの中でも自己決定度の低い、成績や単位の取得を目的とする道具的動機づけ(予防)が高い値を示し、ドイツ語圏の文化への関心や社会への肯定的態度が見て取れる。ドイツ語を話す人々やドイツ語に対する好意を内容とする統合的動機づけは中央値である3.0以上の値を示した。一方、ドイツ語学習に対する社会の期待や家族の影響は低い。コミュニケーションな授業では、ドイツ語を話す自己を授業の中でどのように育成するかが重要となるが、L2MSSの中心概念である理想L2自己の値は高くない。ドイツ語と将来の仕事との関連を内容とする道具的動機づけ(促進)は、中央値の3.0に近い値を示している。外国語の能力は自分の将来にとって役立つと思っはいるが、ドイツ語については現実的なイメージに繋がっていないと思われる。その一方で、ドイツ語の授業体験は肯定的である。ただし標準偏差は大きい。ドイツ語学習への意欲は3.0を少し上回る程度で、高くも低くもない。

表 6 L2 Motivational Self System の各カテゴリーと記述統計 (平均値・標準偏差)

カテゴリー	<i>M</i>	<i>SD</i>	カテゴリー	<i>M</i>	<i>SD</i>
ドイツ語学習への意欲	3.124	.959	道具的動機づけ(予防)	4.015	.817
理想L2自己	2.392	.921	ドイツ語学習への態度	3.526	1.009
義務L2自己	2.060	.948	ドイツ社会への態度	3.803	.950
家族の影響	1.872	.971	ドイツ語圏の文化への関心	3.853	1.052
道具的動機づけ(促進)	2.984	1.028	統合的動機づけ	3.399	.833

2) 学習意欲はどのような概念から説明できるのか

ドイツ語学習への意欲は、とくに、それまでの学習経験を反映しているドイツ語学習への態度、理想L2自己および統合的動機づけから説明可能である。ドイツ社会への態度や文化への関心は高くとも、学習意欲には直接的な影響がない。

3) L2MSSの中心概念である理想L2自己と学習環境との関係

コミュニケーションな授業では、ドイツ語を話す自分を具体的にイメージできることが重要になる。L2MSSの中心概念である理想L2自己は、SDTの3心理的欲求理論の分析では自律性と有能感への欲求を満たす環境で強くなること、将来の自分とドイツ語使用を関係づける道具的動機づけ(促進)、授業経験としてのドイツ語学習への態度、ドイツ語とドイツ語圏の人々への統合度を示す統合的動機づけとの相関が強い。

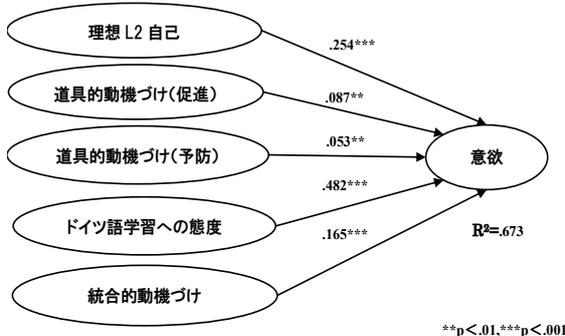


図 2 意欲に影響する要因

人々への統合度を示す統合的動機づけとの相関が強い。

表 7 SDTの3心理的欲求と、意欲に影響を与える要素との相関

	自律性	有能感	関係性	理想自己	道具的 (予防)	道具的 (促進)	学習態度	M	SD
自律性	1							3.598	.8539
有能感	.790**	1						3.403	.9238
関係性	.642**	.606**	1					3.863	.9263
理想自己	.427**	.490**	.266**	1				2.392	.921
道具的 (予防)	.162**	.160**	.228**	-.026	1			4.015	.817
道具的 (促進)	.417**	.383**	.300**	.554**	.076*	1		2.984	1.028
ドイツ語学習態度	.671**	.679**	.594**	.571**	.128**	.536**		3.526	1.009
統合的動機づけ	.558**	.512**	.413**	.594**	.126**	.635**	.694**	3.399	.833

大学でドイツ語を学習する学生たちには、外国語を実際の場面で使う経験が乏しい。そうした彼らがドイツ語を使えるようになるためには、まずドイツ語を使う自分のイメージ、理想自己の形成が必要となる。そのために、例えば、プロジェクト型の授業が考えられるだろう。

(2) 連携研究者は、研究代表者が上述している 2014 年度～2017 年度の科学研究費助成事業で実施した授業参観と聴き取り調査を継続し、2018 年度は 5 名、2019 年度は 4 名の教師から研究協力を得た。今回は授業における複数の作業形態の使い分けに伴うインターアクションの比較・変化を研究テーマとしたが、今回は Legutke & Schart (2016) が挙げている「教師のプロとしての能力」を形作る 4 つの領域に焦点を当てた。すなわち個々の外国語教師が置かれた環境や状況のなかで、「言語と文化」、「教授と学習」、「アイデンティティーと役割」、「協調と成長」が作用し合う過程について、授業参観で共有している授業内容・授業方法を例に取りながら、聴き取り調査を行った。また一連の授業参観を開始する直前の 2018 年 9 月 21 日に、東北大学で「授業参観」に関するワークショップを実施する機会を与えられ、高等教育機関において教師間で授業参観を行い、両者で意見交換・情報交換を行う特殊性にも注目した。

たとえば Duxa (2005) は、従来の「評価」を排除しての授業参観が果たして可能かという問題提起をしている。その問いかけは、第一にドイツ文化センター主導で開発されてきた言語教育機関全般にわたる「教材」を大学で使用する限界を認識し、独自の教育方法を開発すべきではないか、第二に、同僚間での対等の対話が、高等教育に携わる教師に躊躇なく受け入れられるかという疑問である。言語教育についての経験知や専門的知識が同程度の教師間ならば、対等の対話は容易であろうが、言語教育を研究分野とする教師と他の分野を専門領域とする教師間の関係は必ずしも「水平」とは言えない。前者が後者に様々な指摘や示唆を与えることができると考えられる。第三に、授業参観の持つ「情緒的な要素、感情的な要素」にも目を向けるべきと言われる。これら「授業参観」の持つ実効性と問題点については、森田 (2019) にまとめられている。

上記の問いかけを受けて、2018 年度から 2019 年度の授業参観、ならびに聴き取り調査では、教師と参観者が授業自体を振り返った後に、教師の学習経験、教授経験の言語化に伴う過去の追体験をも共有することで、両者の省察を多層的にするように試みた。この対話は、単に調査者が質問し、被調査者がその質問に回答するという反復的な行為ではなく、両者が相互に関わり合いながら、両者の語りが「対話的混合体」となる「対話的構築主義アプローチとしてのインタビュー」(桜井 2002) と変容する可能性を探った。それに伴い「教師自身では客観的に分析し、言語化は難しい」(金井、楠見 2012) といわれる暗示的・暗黙的な実践知が明らかになると考えられるのである。次に教師 9 名のうち 4 名の聴き取り調査については、2019 年 11 月 1 日に名古屋で開催された JALT で発表を行った後に、森田 (2020) にまとめた。

#### 引用文献

- Deci, E.L., & Ryan, R.M. (1985): *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. New York: Plenum Press.
- Dörnyei, Z. (2009): The L2 motivational self system. In: Z. Dörnyei und E. Ushioda (Hg.): *Motivation, language identity and the L2 self*. Bristol, UK, Buffalo, NY: Multilingual Matters (Second language acquisition), 9-42.
- Duxa, S. (2005): Unterrichtsbeobachtung – Kontrollinstrument oder Mittel zur professionellen Entwicklung? In: S. Duxa, H. Adelheid und B. Schmeck (Hg.): *Grenzen überschreiten. Menschen, Sprachen, Kulturen. Festschrift für Inge Schwerdtfeger zum 60. Geburtstag*. Tübingen. Gunter Narr.
- Legutke, M. & Schart, M. (2016): Fremdsprachliche Lehrerbildungsforschung: Bilanz und Perspektiven. In: M. Schart (Hg.) *Fremdsprachendidaktische Professionsforschung: Brennpunkt Lehrerbildung*. Tübingen, Narr Francke, 9-46.
- Schaaf, J. (2018): „Irgendwann möchte ich nach Deutschland gehen.“ Longitudinalstudie zur Deutschlernmotivation an der japanischen Universität.
- 金井壽宏 / 楠見孝 (2012) : 『実践知—エキスパートの知性』. 有斐閣.
- 桜井厚 (2002) : 『インタビューの社会学 ライフストーリーの聞き方』. せりか書房.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 藤原三枝子	4. 巻 162
2. 論文標題 日本の大学における第2外国語としてのドイツ語学習者の動機づけと「ドイツ語使用者としての自己イメージ」 - Doernyei のL2 Motivational Self Systemに基づく質問紙調査による量的分析 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ドイツ文学	6. 最初と最後の頁 87 - 104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Fujiwara, Mieko	4. 巻 1
2. 論文標題 Englischlernerfahrungen und Einstellungen der Studierenden zum Deutschlernen sowie deren mögliches Selbstbild als Deutschverwendende	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Muroi, Y. (Hrsg.) Einheit in der Vielfalt? Germanistik zwischen Divergenz und Konvergenz Asiatische Germanistentagung 2019 in Sapporo	6. 最初と最後の頁 909-918
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 藤原三枝子	4. 巻 24
2. 論文標題 コミュニケーション中心の初級ドイツ語授業における教師のドイツ語教育観 - 前期調査における学習者の学習観との比較に基づいて -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 言語と文化	6. 最初と最後の頁 55-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 森田昌美	4. 巻 6
2. 論文標題 ドイツ語教師のプロフェッショナルリティー育成をめぐる考察（2） - 言語学習歴・教授歴から見た自己形成過程 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 教職教育センタージャーナル	6. 最初と最後の頁 21-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤原三枝子	4. 巻 23
2. 論文標題 ドイツ語学習者の高等学校における英語学習経験とドイツ語学習観との関連性 前期質問紙調査の量的分析を中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 言語と文化	6. 最初と最後の頁 37-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森田昌美	4. 巻 5
2. 論文標題 ドイツ語教師のプロフェッショナルリティー育成をめぐる考察 授業参観の実効性と問題点	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 神戸学院大学教職教育ジャーナル	6. 最初と最後の頁 19-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 藤原三枝子	4. 巻 125
2. 論文標題 コミュニケーション教科書でドイツ語を学ぶ学習者 - 学習観と学習環境に対する認知を中心に -	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本独文学会研究叢書	6. 最初と最後の頁 53-67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 藤原三枝子	4. 巻 22
2. 論文標題 初級ドイツ語学習者の文法・リーディングに関する学習観とリーディングの方略を養成するための練習問題のシーケンス案	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 言語と文化	6. 最初と最後の頁 109-124
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森田昌美	4. 巻 125
2. 論文標題 教師のピリーフ(信念)と授業実践 - コミュニカティブな教科書を使用するドイツ語教師の視点から -	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本独文学会研究叢書	6. 最初と最後の頁 68-86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 森田昌美	4. 巻 3
2. 論文標題 コミュニケーションなドイツ語授業における作業形態 - グループワークとペアワークに関する一考察 -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 共通教育研究紀要	6. 最初と最後の頁 14-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

[学会発表] 計8件(うち招待講演 2件/うち国際学会 5件)

1. 発表者名 Morita, Masami
2. 発表標題 Zukunftsvisionen der japanischen Deutschlehrenden - Was sollen die Studierenden im Deutschunterricht lernen?
3. 学会等名 GETVIC024 (国際学会) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Fujiwara, Mieko
2. 発表標題 Engischlernerfahrungen und Einstellungen der Studierenden zum Deutschlernen sowie deren moegliches Selbstbild als Deutschverwendende
3. 学会等名 Asiatische Germanistentagung (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤原三枝子
2. 発表標題 外国語担当教員の成長を促す授業参観
3. 学会等名 東北大学高度教養教育・学習支援機構主催（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Morita, Masami
2. 発表標題 Zur Entwicklung der professionellen Kompetenzen der Deutschlehrenden Im Deutschunterricht mit kommunikativen Lehrwerken
3. 学会等名 JALT（全国語学教育学会）国際大会 German Workshop（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤原三枝子
2. 発表標題 ベルリン州立ヨーロッパ学校にみる複言語・複文化的能力の可能性
3. 学会等名 国際研究集会2019 CEFRの理念と現実（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森田昌美
2. 発表標題 初習外国語担当教員の成長を促す授業参観
3. 学会等名 東北大学高度教養教育学生支援機構 言語・文化教育センター主催第5回初修外国語授業の相互参観による授業改善プロジェクト
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Fujiwara, Mieko
2. 発表標題 Wie schätzen japanische Studierende kommunikativ orientierte DaF-Lehrwerke ein? Ergebnisse quantitativer und qualitativer Untersuchungen
3. 学会等名 14. IDT(14. Internationale Tagung der Deutschlehrerinnen und Deutschlehrer) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 藤原三枝子
2. 発表標題 学習者はどのようなときに外国語を意欲的に学ぶのか - コミュニカティブな授業における学習環境を自己決定理論から考える -
3. 学会等名 第二言語習得研究会 (JASLA) (招待講演)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 藤原三枝子、桂木忍、本河裕子、野村幸宏、Anja Poller, Rita Sachse-Toussaint	4. 発行年 2019年
2. 出版社 三修社	5. 総ページ数 131
3. 書名 Start frei! 1 スタート 1 コミュニケーション活動で学ぶドイツ語	

1. 著者名 藤原三枝子、桂木忍、本河裕子、野村幸宏、Anja Poller, Rita Sachse-Toussaint	4. 発行年 2019年
2. 出版社 三修社	5. 総ページ数 57
3. 書名 Start frei! 1 Arbeitsbuch スタート 1 ワークブック	

1. 著者名 藤原三枝子、本河裕子、野村幸宏、Carsten Waychert	4. 発行年 2019年
2. 出版社 三修社	5. 総ページ数 124
3. 書名 Start frei! 2 スタート 2 コミュニケーション活動で学ぶドイツ語	

1. 著者名 藤原三枝子、本河裕子、野村幸宏、Carsten Waychert	4. 発行年 2019年
2. 出版社 三修社	5. 総ページ数 47
3. 書名 Start frei! 2 Arbeitsbuch スタート 2 ワークブック	

1. 著者名 西山教行 藤原三枝子 中川慎二 木村護郎クリストフ 古石篤子 柿原武史 境一三 吉田研作 泉水浩隆 太田達也 真嶋潤子 茂木良治 江澤照美 落合佐枝	4. 発行年 2018年
2. 出版社 行路社	5. 総ページ数 349
3. 書名 ことばを教える・ことばを学ぶ 複言語・複文化・ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR)と言語教育	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
連携研究者	森田 昌美  (Morita Masami)  (60739217)	神戸学院大学・共通教育センター・教授    (34509)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------